

上郡町の偉人

大鳥圭介

第三十二回「鵬程万里」 中川由香

長城遊記——国づくり視点の清国観光旅行日記

圭介は明治二十二年から清国で全権大使の任務にありました。着任三年後によくやく余暇を得て宿望の万里の長城へ赴きます。「長城遊記」はその際の旅行記です。明治二十五年四月二十一日から九日間で、約二四〇kmの道程を経ました。山川の名勝を踏み、人情風俗を察し、得る所は多かつたとして、現地に赴いたことの無い方に向けて北部の清をありのまま紹介しました。後の旅行者の便宜の為という意図がありました。

旅程は、馬房村—湯山—昌平州—長陵(長城)—八達嶺—土樓村—羊房村—轟家莊—妙香峰下—大覚寺—黒龍澤—臥仏村—碧雲寺—西山などでした。旅路で詠んだ多数の漢詩や和歌を、旅情豊かに綴ります。例えば、「八達嶺の上関では碧の沢が鱗のように輝き煙を吹いている。丘の上は杏李の花が爛漫。紅と白は春光が香り桃源郷のようだ」と、心洗われる様を情緒豊かに表現します。また大覚寺では、柏果

松の青い針葉、龍の鱗に似た樹肌の大樹に感動し暫し立ち去れないと、漢詩を詠みました。臥仏寺では、横たわった仏像を見て暹羅(タイ)で見たと同じだったと回顧します。苔に覆われた明代の石碑を読み、祭事に寄付する様子に、圭介の少年のような好奇心と当地の文化を重んじる様子が、感じられます。一方で、途中の不潔さや、垢まみれの壁、汚れた温泉、車夫の怠惰さや地元民への失礼さなどには、辟易しています。特に宿泊施設の不満は率直に記しています。今のようにインターネットで感想が世界中に知れ渡る事はなく、後続の旅行者には貴重な情報源となったでしょう。

圭介の経済社会への視線の深さが、他の旅行記と一線を画します。例えば、八達嶺では皆が万里の長城の壮麗さに目を奪われますが、圭介は、ここが古来より蒙古と清国の一大商路であることに着目。駱駝が往來し、食料、ソーダや獣皮など北部の産物を運び、ロシアへ清の茶を運んだ

と、通商に目をつけます。また、石だらけで歩行困難だった道路を、発破で岩を砕き、小梁を設け砂土を敷き、驢車の通行を容易にした、その修繕費として関税を当てている運営を賞賛します。加えて、馬二頭六文、駱駝五文、驢馬三文、雑貨百二十斤に付き二銭六分など、関税額を調べ記します。当時の税制や物価研究に資する貴重な記録です。さらに、土中に半分埋もれた鉄製の砲の泥を払い、明代の軍門王が鑄造させたものと観察。明代の堅実な方石の積み方、煉瓦の種類、砲眼の造り方など、素人離れした眼で細述します。かつて西洋城郭の設計書を訳し、自らも四稜郭を建設した圭介ならではの視点です。

一方黒龍澤では「氣候や地質が茶の栽培や養蚕に向いているのに、茶や桑が栽培されていない。人民の中に志す者がいない。地形平坦で土壌肥沃なのに、水田はわずかだ。水利を行えば良田を幾万も得て民を潤し国に利をもたらさう。なのに首都の北部は、森林伐採に節制が無い。樹木が乱伐され水源が枯れ、土壌が乾燥し、灌漑が出来ない。七月八月には大雨洪水で民家が流出し、田畑が荒廃している」と嘆きます。

早魃を防ぎ水を制するのを忘れて、どうして国を治めることができようかと、圭介は森林・水源保全と洪水防御の必要性を説きます。そこには圭介の国土観が込められています。

また、西山で産出された石炭を北京へ駱駝が運搬する様子を記します。「山中に石炭坑があり、齋堂のものが最大で、無煙炭で質は良い。しかし、古い採掘法を固持し改良がない。運搬も駱駝が行うため、北京での価格が非常に高くなる」と指摘します。資源の経済性は、採掘方法と運搬方法が鍵になります。この点にも圭介の鋭い感覚が表れています。

一方「驢は牡驢馬と牝馬を掛け合わせた精強な生き物で、長距離、険路も可能。本邦に導入し繁殖すれば国益を増すだろう。農商務省、陸軍省で購入し繁殖すべき」と圭介は勧めます。他国の優れた点を発見し、すぐさま自国に取り入れようとするのは、圭介の人生を通じた姿勢です。

旅行記は、圭介の社会、経済、産業、農業、地質、資源、土木、植物学に至る素養、それらから成る国づくりの英知を伺わせませす。国家建設視点のガイドブックとも言えます。

まちの話題

特集

トピックス

暮らしの案内

お知らせ

イベント

鵬程万里

スポーツニュース

情報ステーション

当番医・新着図書情報

町長コラム